

## 横浜・外国人遊歩道の風景

飯田 晶子

### 1. はじめに

横浜居留地は、幕末の1859（安政6）年の開港とともに整備された山下居留地と、1867（慶応3）年にその南側に増設された山手居留地の2つによりなる。居留地に暮らした外国人たちは、西洋式の建物、鉄道、公園、テニスコートなど、様々な西洋の技術や文化を居留地に持ち込んだ。現在でも、居留地ゆかりの施設には、当時の雰囲気思いを馳せながら散策を楽しむ人々が多く訪れる。一方、山下・山手の居留地の他に、「外国人遊歩道」という、居留地に暮らした外国人たちが眺望や社交を楽しみながら遊歩した道が存在したことはあまり知られていない。

外国人遊歩道は、山手居留地の立地する海拔400～500メートルの丘陵地を周遊するように整備された延長約10

キロメートルの遊歩道で、1864（元治元）年に開通し、1966（慶応2）年に完成した（図1）<sup>(1)</sup>。この遊歩道は、マカダム舗装という表面を石や砂利などで敷き固められた道で、日本で初めての本格的な馬車道であった。現在でも有名な横浜関内の馬車道は1868（慶応4）年の開通である。外国人遊歩道はそれより2年早い。

この遊歩道は、当時外国人たちが「ミシシッピベイ」と呼び親しんだ根岸湾などの風光明媚な土地や、根岸競馬場（現在の根岸森林公園）や山手公園などの西洋の娯楽施設を繋いでいた。居留地に暮らした人々は馬車で遊歩道を周遊しながら、眺望や社交を楽しんだ。当時の様子は、外国人写真家やその日本人弟子たちによる風景写真に数多く収められている。特に、彼らが撮影した写真の一部は、当時

流行した横浜写真と呼ばれる、モノクロ写真に水彩画の色彩を施した土産物の美しい写真や、それを使った横浜絵葉書として、現代にまでその様子を伝えてくれている<sup>(2)</sup>。

本稿では、外国人遊歩道が整備された時代背景を概観した上で、外国人遊歩道沿いで幕末明治期に撮影された横浜写真と横浜絵葉書を用いて、当時の横浜に暮らした人々が、遊歩道を周遊しながらどのような風景を眺めていたか振り返ってみよう。その際、特に丘陵地の地形に着目し、変化に富む丘陵地の地形を生かして生み出されたダイナミックな景観の構造を分析していく。

なお、本稿では、「風景」と「景観」という微妙にニュアンスの異なる2つの用語を使い分けている。両者の違いについて確定した定説は存在せず、ほとんど同義として使われることも多いが、本稿では「風景」を眺めの対象を自分と分け隔てなく情緒的に捉えている場合に用い、「景観」を眺めの対象と自分を切り離し、対象を客観的に、分析的に捉える場合に用いることとする。例えば、当時の人々が

見た眺めを示す場合は「風景」という用語を用い、現在それを分析的に捉えて解釈する場合には「景観」という用語を用いている。

## 2. 外国人遊歩道が整備された時代背景

居留地が設置された当時、外国人が外出可能な範囲は幕府により制限されていた。これは、1858（安政5）年の日米修好通商条約第七条「十里遊歩規定」によるもので、横

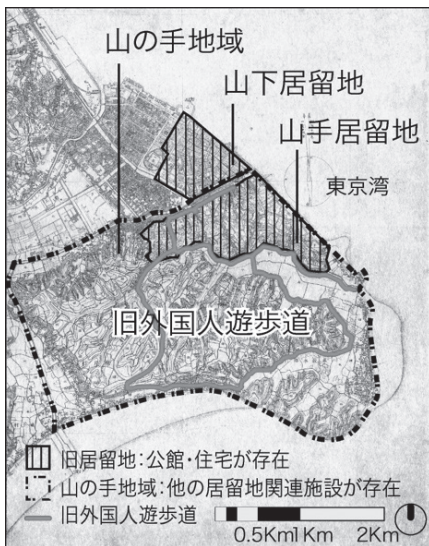


図1：居留地と外国人遊歩道  
（フランス式彩色地図に加筆）

浜居留地の外国人は、「神奈川 六郷川筋を限として其外…各方へ十里」と外出可能範囲が規定されていた。つまり、横浜居留地を中心として、北は多摩川まで、その他の方面へは10里（約40キロメートル）までの範囲に限定されていた。自由に外出することが禁止されていた外国人は、居留地開設当初から、日本政府に対して、運動や健康やリフレッシュのために、遊歩道、公園、競馬場などを設置することを求めていた。1863（文久2）年の米国公使が幕府にあてた書簡には、「横浜に居留する外国人並びに其の外国人を訪問する友人の為に、安静にして意を悦ばしむる程の遊散場を造り、又海上を眺望して横浜より本牧へ往還するの道を造る」と記されている<sup>(1)</sup>。さらに、1864（元治元）年の「横濱外国人居留地十二ヶ條覚書」第十一条<sup>(2)</sup>の中で遊歩道の整備について次のように記されている。「富令掛念の場合も有之に付日本政府にて外国人の東海道出行可成丈け省かん為に日本政府にて長サ四五マイル巾二十フットに減せざる善き街道を外国人運動の為に根岸村を通し團轉し既に差出したる圖の

通り建築方頭取メジヨル、レーの差圖にて既に取掛りたる工作に従て営むこと並に右街道も日本政府の費用にて賄ふへし」。すなわち、長さ6〜8キロメートル・幅6メートルの街道を外国人の運動のためにつくること、外国人技師の設計図に沿って進めること、街道の整備にかかる費用は日本政府が負担することなどが取り決められた。そして、1866（慶応2）年に外国人遊歩道の整備が完了した<sup>(1)</sup>。さらに、英米公使は遊歩道の整備と合わせて競馬場や公園の設置についても要望を出しており、1866（慶応2）年に根岸競馬場が、1870（明治3）年に山手公園が、それぞれ外国人遊歩道沿いに整備された。

そのように居留地において近代的な娯楽・社交施設が整備された19世紀中葉は、西洋社会において貴族社会が衰退し、代わりに産業革命によって生まれた中・上流階級のいわゆるブルジョアジーが台頭した時代であった。ブルジョアジーたちは、公共のプロムナード（遊歩道）を造営するとともに、それまで特権階級だけのためであったガーデン

を一般へと開放し、いわゆるパブリック・ガーデン(公けの遊園Ⅱ公園)を次々に整備していた<sup>(4)</sup>。日本に渡ってきた外国人たちは、本国で体験していたそのような空間を居留地である横浜にも造り出そうとしたのである。

### 3. 外国人遊歩道の風景

それでは次に、幕末明治期に撮影された横浜写真と横浜絵葉書を用いて、当時の外国人たちが眺めた風景についてその特徴をみていこう。その際、視対象(眺める対象)、視点場(眺める人が立っている場所)、及び景観の構造の3つの観点から分析していく。なお、本稿では文献<sup>(5)</sup>、<sup>(10)</sup>で整理されている横浜写真・横浜絵葉書のうち、外国人遊歩道沿いにおいて撮影されたことが特定できた239枚の写真を用いている<sup>(11)</sup>。

#### (1) 視対象の特性

はじめに、視対象(眺める対象)の特性について、239枚の外国人遊歩道沿いの写真に写された景観要素に着目

してみていこう。

まず、各写真につけられた表題と説明文をもとに、風景の主題となっている主要な景観要素を抽出し、建築物、水、緑という大カテゴリーと、それをさらに具体的に分類したサブカテゴリーごとに整理した(図2)。その結果、多くの写真で主要な景観要素として撮影されているものとしては、山下居留地(43枚)や本牧・根岸の村(20枚)、元町(16枚)といった「街並」と、堀川(33枚)や本牧の海と岬(17枚)といった「川」や「海」などの水辺に関するものが多いことがわかった。その他に、西洋建築物(13枚)や寺社(14枚)や茶屋(14枚)などの「単体建築物」を写したものの、階段・坂道(27枚)などの「土木構造物」を写したものの、公園・墓地(13枚)といった「屋外施設」を写したものも多く見られた。

次に、主要な景観要素だけでなく、写真に写された全ての景観要素に関してもカテゴリーごとに列挙した(図3)。その結果、谷戸斜面緑地、海岸段丘緑地、鎮守の森、遠方

の半島や富士といった「自然」の要素や、橋や道といった「土木構造物」の要素も出現頻度が高かった。先の主要な景観要素を「図」と捉えるならば、これらは「地」としての役割がある。特に、前者の自然的要素は景観の背景として、「図」にあたる対象物を浮かび上がらせる効果があり、後者の橋や道は景観の舞台として、「図」にあたる対象物が存在する土台を支え、かつ躍動感を与えている。

また、居留地の近郊という場所性から、和・洋の両方の要素が見られることも特徴的であった。具体的には、日本建築物（寺社44枚・茶屋36枚）と西洋建築物（2

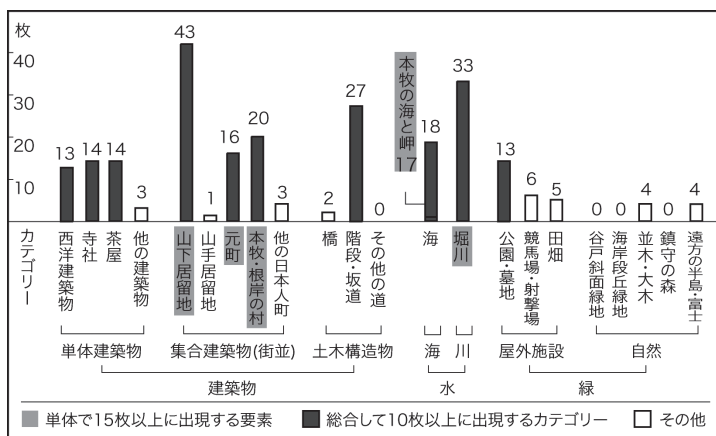


図2：主要な景観要素の出現写真枚数（出典：文献12）

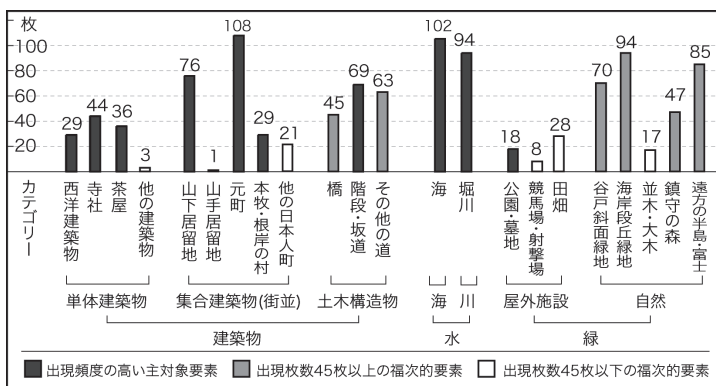


図3：全ての景観要素の出現写真枚数（出典：文献12）



地形分類に位置する26箇所の視点を抽出できた(図4)。地形分類図を用いた理由は、この地における景観が、丘陵地の起伏や川や海など地形的な要素に大きく左右されているためである。最も撮影枚数が多いものは段丘斜面(視点場6カ所、写真計64枚)であり、水面(視点場1カ所、写真計52枚)、低位段丘面(視点場5カ所、写真計40枚)、砂州(視点場2カ所、写真計33枚)、谷底低地(視点場5カ所、写真計21枚)が続いている。

このことから、視点場は丘陵と低地の境界である崖線や、陸と川や海などが交わる水辺など、際(きわ)の空間に集中して立地していることがみてとれる。一方、後背湿地や氾濫平野などの低地の開けた場所には視点場は存在していない。際(きわ)は、風景がダイナミックに切り替わる地点であり、風景を眺める場所として当時の人々にも好まれていたことが読みとれる。

### (3) 風景写真にみる景観の構造

続いて、実際に外国人遊歩道沿いで撮影された風景写真

を元に、それを分析的に捉えた際に見えてくる景観の構造を読み解いて見よう。表1は、視対象と視点場の特性の分析により明らかになった主要な景観要素と26の視点場の関係を整理したものである。ここから、風景を対象とした写真で、かつ同じ構図で撮影された写真が4枚以上見られたものを外国人遊歩道における代表的な風景として抽出した。その結果、AからMまでの13の風景を抽出することができた(図5)。そして、それら13の風景について、これまでの視対象と視点場といった空間構造に関する分析に加え、視野の範囲と視線の向きといった視覚構造に関する分析を行なった。

なお、視野の範囲とは、視対象が「近景」・「中景」・「遠景」のどの範囲にわたるかとし、視線の向きとは、視対象に対する視線の向きが「俯瞰景」(高所より見渡す景)・「仰視景」(低所より仰ぎ見る景)・「正面景」(対象物を正面から見る景)のどれにあたるかとした<sup>13)</sup>。以降では、この13の風景について、順にその特徴をみていこう。

表1：個々の視点場における主要な景観要素の整理（出典：文献12）

視点場	主対象要素	建築物											水		緑					合計写真枚数			
		単体建築物			集合建築物(街並)				土木構造物				海・川	湖・池	屋外施設		自然						
		西洋建築物	社寺	茶屋	他の建築物	山下居留地	山手居留地	元町商店街	本牧・根岸	他の日本人町	階段・坂道	その他の道			公園・墓地	競馬場・射撃場	谷戸斜面緑地	海岸段丘緑地	並木・大木		鎮守の森	遠方の半島・富士山	
水面	I-1 堀川	10	1											33								1	52
砂州	II-1 本牧十二天と砂州		3	10										12								3	28
	II-2 根岸砂州													5									5
段丘斜面	III-1 不動坂		1																				21
	III-2 元町百段				22																		22
	III-3 フレンチプラフ				13																		13
	III-4 外国人墓地				1																		5
	III-5 フランス山				2																		2
	III-6 間口														1								1
低位段丘面	IV-1 元町		7																				23
	IV-2 元町百段下													6									6
	IV-3 白滝不動尊		2											4									6
	IV-4 北方																				2		2
	IV-5 地藏坂下			1										1									3
谷戸斜面	V-1 射撃場																					4	4
	V-2 北方西																					3	2
	V-3 桜坂													1								1	2
	V-4 山中町			4																			5
谷底低地	VI-1 地藏坂													5									5
	VI-2 谷戸坂		3											3									6
	VI-3 貝殻坂					2								2									4
	VI-4 競馬場																					2	2
	VI-5 妙善寺			2																		2	4
段丘面	VII-1 山手公園																					10	10
	VII-2 地藏坂上				2																		3
	VII-3 谷戸坂上				1	1																	2
合計写真枚数		13	14	14	3	43	1	16	20	3	2	27	0	18	33	13	6	5	0	0	0	4	239

□ 4枚以上の写真が存在するもの=景    ◻ 風景（単体独立建築物以外）

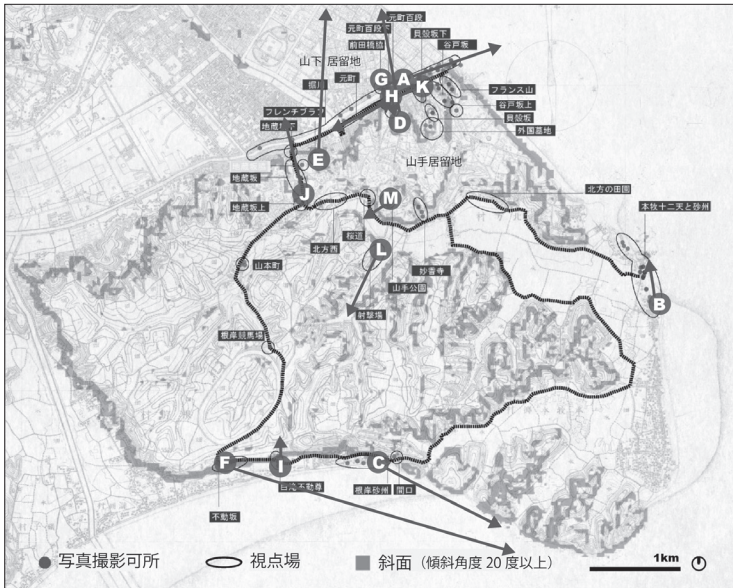


図5：外国人遊歩道沿いの景観（フランス式彩色地図の上に加筆）（出典：文献12）



Aの「堀川と川沿いの街並」(33枚)は、山下居留地と元町の間を流れる堀川沿いの風景である。岸边や橋の上、あるいは川に浮かぶ船の上から、兩岸の街並を見通しており、近景から中景、遠景へと奥行きのある景観が広がっている。例にあげた写真1は、左手に山下居留地が、右手に元町の町並みが写っている。また、左手奥には当時横浜を代表するホテルであったグランドホテルが、右手奥にはひととき大きな増徳寺の屋根が見える。両者ともに地域のランドマーク的存在であり、多くの写真に写された。和と洋が出会うこの堀川の風景には特異な趣きがあり、外国人遊歩道沿いで撮影された239枚中で最も多い33枚の写真に収められた。しかし、堀川上部には高度経済成長期に高架道路が架けられ、川を中心とした街の賑わいと海まで見通せる奥行きある風景は失われてしまっている。

Bの「本牧十二天の岬」(12枚)は、山手居留地の南東側の海に突き出した岬にある本牧十二天を眺める風景である。現在は埋め立てによって周囲を工業地帯に囲まれている

るが、当時は風光明媚な土地として知られた。例にあげた写真2には、近景に樹木と浜辺が映り、中景に浜辺が描くゆるやかな内向きのカーブの先にある十二天社の岬と麓の茶屋を眺めている。そして、その先の遠景には、遮るものの何一つない海が広がっている。この小さな内海の穏やかで、かつ遠くまで見渡せる景観は、日本人・外国人を問わず人々に魅力的に映ったのであろう。本牧十二天のためにわざわざ外国人遊歩道の支道を開通していることから当時の人気を伺うことができる。



写真1：堀川と川沿いの街並  
(出典：文献9)  
横浜開港資料館所蔵



写真2：本牧十二天の岬  
(出典：文献10)  
長崎大学附属図書館所蔵



写真3：本牧三の谷の岬  
(出典：文献9)  
横浜開港資料館所蔵

丘斜面の緑地が海と平行に弧を書きながら三の谷まで続いている。ほぼ中央に配された三の谷がポイントになり、その手前の海岸線のカーブを強調している。また、ほぼ中央に地平線を取り、海と空の広がり等を等しく感じる構図で、奥行きと広がりを感じることができ、景観である。現在は、埋め立てにより海岸線は遠のき、また首都高速湾岸線の高架道路やJR根岸線などの鉄道が並走しており、埋立地と市街地を強く分断している。もともとの景観構造は失われているが、三の谷の岬は本牧風致地区に含まれ保

Cの「本牧三の谷の岬」

(5枚)は、丘陵地の南側、根岸湾の浜辺から、現在の三溪園のある本牧三の谷を眺める風景である。例にあげた写真3では、近景には海を眺めて佇む人や船が見え、その先の中景に海岸段

全されている。

Dの「元町百段からの居留地」(22枚)は、現在の元町百段公園の斜面突端から居留地の街並と海を眺望する風景である(写真4)。元町百段とは、丘の上に存在した浅間神社に向けて垂直に伸びる階段で、段階が101段あったことからそう呼ばれた。ここからの眺めは、階段が急であるために近景は見えないか、あるいは境内の木のみであり、主に中景から遠景にかけての元町と山下居留地の街並と海を眼下に一望する俯瞰景が広がっていた。浅間神社と元町百段は関東大震災で焼失し、その後再建されることはなかったが、現在でも元町百段公園の突端からはみなどみらい21やベイブリッジなど新たな横浜のランドマークを眺望することができる。

Eの「フレンチブラフ



写真4：元町百段からの居留地  
(出典：文献7)  
横浜開港資料館所蔵



写真5：フレンチブラフからの  
の居留地（出典：文献5）  
横浜開港資料館所蔵



写真6：現在の山手イタリア  
山公園からの眺望（筆者撮影）

からの居留地」(13枚)は、元町百段よりやや西側の地蔵坂脇にあるフレンチブラフ(ブラフとは切り立った地形の意味)と呼ばれた斜面の突端から、居留地の街並と海を眺望する風景である。例にあげた写真5は、近景に吉田新田の埋立のために削られた山手の丘の斜面がむき出しになって見えている。そして、その奥の中景から遠景にかけて、堀川と山手居留地、海が続いて見える。現在、この地は「山手イタリア山庭園」として一般開放されており、写真6のように庭園や建物内から横浜の町並みを俯瞰することができる。

Fの「根岸湾と漁村」(20枚)は、根岸競馬場から根岸湾へと下る不動坂からの眺望風景である。不動坂は、急な崖線の斜面に対して、斜めに道がつけられていることに特徴がある。例にあげた写真7では、近景に不動坂と段丘斜面の緑地が見え、中景から遠景にかけて根岸の街並と本牧岬や海を俯瞰する景観が広がっている。この根岸湾の海は、ペリーによって、故郷のミシシッピの海に似ていたことから「ミシシッピベイ」と名付けられ、居留地に暮らした外国人たちに親しまれていた。現在では、根岸湾の埋立により坂からは煙突が立ち並ぶ工業地の景観が広がっており、漁村の面影は失われているが、一部開発から免れた斜面緑地が残されている。

Gの「前田橋と元町百段」(5枚)は、山下居留地側の堀川の川岸から



写真7：根岸湾と漁村  
(出典：文献10)  
長崎大学附属図書館所蔵



写真8：前田橋と元町百段  
(出典：文献8)  
横浜開港資料館所蔵

前田橋を抜け、そこから垂直方向へ伸びる元町百段を仰ぎ見る風景である。例にあげた写真8では、近景に堀川と前田橋が写り、中景に元町百段とその上の浅間神社、及

び斜面緑地が写っている。また、手前の堀川沿いには、橋を行き交う人々や川をゆく船などが見える。現在は、堀川上部を高架道路が通り、また先にも述べたように元町百段と浅間神社が関東大震災で焼失したため、当時の風景は失われている。

目の「元町百段の参道の景」(6枚)は、先の「前田橋から見た元町百段の景」と似た構図であるが、前田橋を少し進んで元町の街から百段をより近くに仰ぎ見る風景である。例にあげた写真9は、堀川の水辺が見えないが、代わりに近景に元町百段と斜面緑地の表情がより感じられる。



写真9：元町百段の参道の景  
(出典：文献8)  
横浜開港資料館所蔵



写真10：白滝不動尊の参道  
(出典：文献8)  
横浜開港資料館所蔵

現在、百段の登り口には商店が立ち、丘を仰ぎ見ることはできない。斜面に残った緑地だけが当時の名残りを示している。

Iの「白滝不動尊の参道」(4枚)は、旧根岸村の白滝不動尊を参道下から仰ぎ見る風景である。白滝不動尊は、江戸時代よりある不動院で、その名前が示すように階段の脇に滝がある。例にあげた写真10は、近景として麓の茶屋とともに、参道の石段の途中に和傘を広げた着物の親子が写り、中景に不動尊と斜面緑地が写っている。この白滝は、当時は、幅0.6メートル、高さ1.8メートルの横浜随一の見事な滝であったが<sup>4)</sup>、現在は、丘陵地上の開発により水



写真11：地蔵坂  
(出典：文献10)  
長崎大学附属図書館所蔵



写真12：現在の地蔵坂  
(筆者撮影)

源が絶たれたため、細々と一筋の水が流れるのみである。しかし、参道の石段は現在でも残っており、鬱蒼と茂った斜面の緑とともにかつての様子を今に伝えてくれている。

Jの「地蔵坂」(5枚)は谷底の比較的緩やかな地形を利用してつくられた地蔵坂の途中から、坂を見下ろしながら眼下の町並みを見通す風景である。写真11は、近景から中景にかけて地蔵坂とその脇の谷戸斜面緑地を見て、その奥に山下居留地と海とを遠望している。谷底の道のもつ見通し効果と居留地や海への視界という2つの要素が相まって、奥行きを生んでいる。現在では、写真12のよう

に道路沿いに中層の建物が増え、視野が狭まっているが、坂の上からは道の先の遠景にみたとみらい21など横浜の新しいランドマークを見通すことができる。

Kの「元町商店街」(16枚)は、元町の商店街を真っ直ぐに見通す風景である。左手に山手居留地の斜面緑地が見える。なかでも浅間神社とその鎮守の森が際立って見える。

写真13は、元町商店街の東端に位置する増徳寺の本堂脇の薬師堂へ上る階段から、この元町商店街を近景から中景にかけて見通している。増徳寺は関東大震災によって焼失し、今では三階建てのショッピングモール「元町プラザ」が建っている。その二階

のテラスからは今でもかつてと同じように元町商店街を見通すことができる。

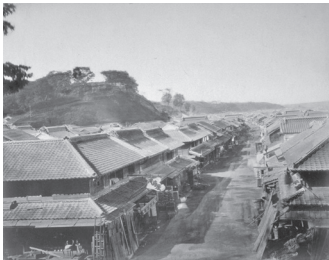


写真13：元町商店街  
(出典：文献10)  
長崎大学附属図書館所蔵



写真14：射撃場  
(出典：文献7)  
横浜開港資料館所蔵



写真15：射撃場跡の商店街  
(筆者撮影)

上の「射撃場」(4枚)は、直線上に伸びる谷底を利用してつくられた射撃場を、その谷戸の脇の斜面から中景にとらえて眺めた風景である。この射撃場は軍事あるいは余暇として射撃の練習に使用された。そして、その射撃場の全貌をこの視点場から見ることができ。例にあげた写真14に見て取れるように、谷戸地形のもつ見通し効果により、直線的な射撃コースが強調されている。現在、このあたり一帯は高密度な市街地となっている。写真15に見てとれるように谷戸の直線的な構造を利用してつくられた真つ直ぐに伸びる大和町商店街が、かつての射撃場の構造を引



写真16：山手公園  
(出典：文献7)  
横浜開港資料館所蔵



写真17：現在の山手公園  
(筆者撮影)

き継いでいる。  
Mの「山手公園」(10枚)は、居留地に暮らした外国人の要望を受け、1870(明治3)年に日本で初の近代公園として整備された山手公園を写した風景である。山手公園は、段丘上のなだらかな場所に造られた。写真16のように、丘の上のゆるやかな芝生の面で遊ぶ子供達とそれを見守る親達の姿、花壇やテニスコートで遊ぶ人々の姿などが主に写されている。写真17に見られるように、現在の山手公園にもその広々とした丘の景観が広がっているが、樹々は当時よりも大きくなり、緑陰が濃くなっている。

#### 4. まとめ

本稿では、横浜における居留地文化が花開いた幕末明治期の風景について、外国人遊歩道を中心に横浜写真・横浜絵葉書を用いて分析を行なった。外国人遊歩道は、居留地や海を一望できる丘の上、西洋式の公園や競馬場や射撃場などの外国人によってつくられた娯楽・社交施設、寺社などの日本の名所を繋いでいた。そして、丘陵地の崖線や水辺などの地形の際（きわ）を転換点として、ダイナミックに風景が変化、展開する表情豊かな遊歩道であった。特に、当該地域の景観構造の要ともいえる崖線は、丘陵南北の開放的な直線形から、内側の谷戸の内包的な形態まで変化に富んでおり、この地形的な特徴と外国人居留地の異文化とが密接に結びつき、当時ここにしかない豊かな風景が広がっていたといえる。居留地に暮らした当時の人々は、彼らの邸宅のすぐ裏にあるこの身近な場所で、馬車や人力車などで遊行し、社交を楽しんだ。このように、外国人遊歩道で撮影された風景写真からは、山下居留地と山手居留地とい

う外国人専用区の外における、居留地で花開いたもう一つの文化の様相を垣間見ることができるといえる。

※この原稿は筆者の2008（平成20）年の既発表論文<sup>12）</sup>と慶應義塾大学大学院に提出した修士論文「景観の修復と再生による地域環境デザイン——横浜旧居留地における景観構造の分析とその現代的有用性の検討——」を元に執筆したものである。

#### 【補注・引用文献】

- (1) 横浜市編（1959）…横浜市史第2巻…832—835頁
- (2) 「横浜写真」は、主に居留地に住む外国人の祖国への土産用に日本の風景や風俗を撮影した写真に色彩を施したもので、横浜が製作の中心であったためにそう呼ばれた。また、「横浜絵葉書」は、横浜写真を使ってつくられた絵葉書で、郵便制度の施行以降に発売され日本人の間でも流行した。
- (3) 外務省外交史料館所蔵…続通信全覧類輯之部地所門 横濱外国人居留地十二ヶ條覚書…710—719頁
- (4) 白幡洋三郎（1995）…近代都市公園史の研究—欧化の系譜…

思文閣出版、335頁

(5) 横浜開港資料館編(2006)・F. ベアト写真集1幕末日本の風景と人びと・明石書店、199頁

(6) 横浜開港資料館編(2006)・F. ベアト写真集2外国人カメラマンが撮った幕末日本・明石書店、135頁

(7) 横浜都市発展記念館・横浜開港資料館編(2007)・文明開化期の横浜・東京―古写真でみる風景・有隣堂、239頁

(8) 横浜開港資料館編(2003)・明治の日本《横浜写真》の世界・有隣堂、263頁

(9) 横浜開港資料館編(1999)・100年前の横浜・神奈川―絵葉書でみる風景・有隣堂、349頁

(10) 長崎大学付属図書館・幕末明治期日本古写真メタデータベース <http://oldphoto.hnagasaki-u.ac.jp/> (2018年9月27日アクセス)

(11) 横浜開港資料館には本研究で取り上げた写真以外にも未整理の写真が数多く存在する。本研究では、既に整理されている文献5～10を用いたため、未整備の写真は扱いきれていない。

(12) 飯田晶子・石川幹子(2008) 幕末・明治期の横浜旧居留地・

外国人遊歩道における文化的景観に関する研究―「横浜写真」・「横浜絵葉書」を用いた景観分析を通して―・都市計画論文集4

3(3)、541―546頁

(13) 視野の範囲の近景・中景・遠景とは、文献15の景観用語事

典の定義を用い、近景を視点から340～460mまで、中景を340～460mから2.1～2.8kmまで、遠景を中景以上とした。また、視線の向きに関しても、同じく景観用語事典

による仰角・俯角の指標を用い、俯瞰を俯角マイナス2度以下、仰視を仰角14度以上とした。

(14) 中区制50周年記念事業実行委員会編(1985)・横浜中区

史地区編第9章、大日本印刷株式会社、740―741頁

(15) 篠原修(2007年)・景観用語事典(増補改訂版)・彰国社、355頁